

佐々木 繁（ささき しげる）

1、プロフィール

詩人・随筆家。昭和2年詩誌「鴉」・昭和3年詩誌「唄」を編集発行し、詩人としては、静謐な抒情的象徴詩を書き、新進詩人と評価された。戦後は随筆集を刊行し、活動した。

<生没>

1909(明治 42)年3月3日 ~ 1993(平成5)年 11 月1日

<代表作>

詩誌「鴉」

随筆集『菓子屋ラグノオ』

<青森との関わり>

弘前市に生まれる。家業(菓子屋)に従事する傍ら、詩および随筆の分野において、創作活動をした。

2、作家解説

詩人・随筆家。明治 42 年弘前市百石町に生まれる。大正4年、時敏尋常小学校に入学。在学中、「みづゑ」に応募した水彩画が入選、画才が期待された。10年4月、県立弘前中学校に入学。12年、関東大震災で弘前に帰郷した福士幸次郎が、しばらく繁の家に寄寓、それが縁で、文学に目覚め、創作を始める。一戸玲太郎(謙三)との交遊もこの頃から始まった。13、14年「弘前新聞」募集の福士幸次郎選の「詩」に応募し、入選する。筆名は笹木滋。14年秋、弘中短歌会ができ、弘前中学校教師穴沢赳夫が指導、繁の家で月例会が持たれた。15年3月、弘前中学校卒業、家業の菓子屋に従事し、その傍ら詩作を続ける。昭和2年4月、北原白秋主宰の「近代風景」の「詩」の部で推薦作品に選ばれる。6月編集・発行人として詩誌「鴉」を創刊する。本県の詩人たちにセンセーションを巻き起こした。広く県外県内の詩人から原稿を集め、主な執筆者は、佐々木繁・一戸玲太郎・福士

幸次郎・斎藤吉彦・八木隆一郎・棟方寅雄らである。第5号掲載の宮越武助が翻訳したカルコの詩の1篇「愛」が風俗壊乱ということで発禁となり、これを契機に終刊となる。昭和3年 11 月詩誌「唄」を創刊。2号で終刊。詩人としては、青春の懊悩・孤独を静謐な抒情に還元した象徴詩を書き、新進詩人と評価された。この頃、福士幸次郎に「詩を作るよりよき市民となれ」と諭され、詩作を断った。昭和 28 年 6 月、随筆集『菓子屋ラグノオ』（りら・そさえて刊）を刊行。31 年、一戸謙三・高木恭造らと不串会を結成、7月弘前公園に福士幸次郎詩碑を建立する。53 年1月、随筆集『いらぬ左平次』（北の街社刊）、54 年 12 月随筆集『下手の覚え』（北の街社刊）、62 年6月、随筆集『老の手枕』（北の街社刊）を刊行、精力的に執筆活動を行い、生活者の心境を描いた。平成2年 10 月、合冊復刻版『鴉』（北の街社刊）を刊行。平成5年 11 月1日、弘前市において、81 歳で死去。

3、資料紹介

○「鴉」（合冊復刻版）

図書

1990(平成2)年 10 月 30 日

135mm × 195mm

詩誌「鴉」・「唄」合冊復刻版。平成2年 10 月 30 日発行。北の街社刊。内容は「鴉」・「唄」掲載作品を作家別に編集収録、小野正文の「あとがき」がある。アンソロジーの体裁をとり、二誌の全貌をも概観できる。